ご主人様と冬休み

成人向
FOR ADULT ONLY

DiGiket.com

男湯
大人 6
小人 3
男児 2
お得な回数
10回500
(お食事1
筒中
筒中
冬の
ちんちん
690
5cm
歳以上の
所への
祈りして
筒乃湯
男児限定
おちんちんプラン
(10~13歳)
平日100円
回数券もございます
各種割引
タオル使用不可

「まいったな…」
蒼介は自分の股間を見て大きなため息をつく。
ギンギンに完全勃起したペニスが反り返り、半剥けの亀頭と正面から見つめ合ってしまう。
いわゆるスーパー銭湯の洗い場で、体を洗うフリをして上手く股間を人目から隠しているが、左右の知らないおじさんや、その向こう側にいる部活仲間達の存在を意識すればするほどペニスに血液がどんどん集まっていくのだ。
「…まさかココで抜くワケにもいかないし」
やっぱり来るんじゃなかった。
こうなることは分かっていたのに。
蒼介は心の底から後悔してさらに深く、呻くようなため息をつく。

筍学園中等部硬式バドミントン部の二年生で、裏エースという嬉しくない非公式な肩書が全校的に定着している柳本蒼介は、露出狂だ。
つい最近、そう自覚した。正確にはかなり前から気付いていたが、ようやく観念して認めた。が正しい。
と言っても実際に露出行為をしたことはまだない。
ただ、他人にチンポを見られる妄想で射精できてしまい、お気に入りのオナニーのオカズは、教室の黒板の前で自分だけ全裸に剥かれて、クラスメートの前での射精を命令される自分、という妄想で…
さらに最近は、着替えや公衆浴場などチンポを出して当然の環境で、実際には存在しない他人からの視線を勝手に妄想して性的快感を得てしまうようになり、自分の性癖を認めざるをえなくなった。
それまでは露天風呂でテンションが上がるくらいだったのが、いつの間にか悪化していて、先月同じように部活仲間達と練習試合帰りにこのスーパー銭湯に寄った際に、妄想が暴走してチンポが暴発しかけて人生終了の瀬戸際に自分から突進してしまったのだ。

「あのときはマジでヤバかった…」
もし本当に部活仲間の前で射精していたら、もう学校には居られなくなるところだった。
なんとかギリギリ勃起だけで踏みとどまって生理現象からの悪ふざけ、ということで乗り切ったのだ。
その際に自分の性癖を正面から考えた結果、いわゆる露出狂という性癖に符合するらしいと認めて、自分の場合にそのトリガーを引く状況はとにかく避けるしかないと固く決心したのだ！…が。
今日も練習試合があって自然な流れでまたスーパー銭湯に行こうという話になり、自分は行けないと上手く切り出すことができずに結局また部活仲間達と一緒に来てしまい、案の定、脊髄反射のように『他人に裸体を見られている』という妄想が発動して完全勃起していた。
「…オレも、アイツみたいにハッキリ言えたらなぁ」
ギンギンに勃起した自分のペニスを見ながら愚痴と自虐を吐き出す。
「裏」ではない本物のエース選手で同じ二年生の蒼乃拓弥は、予定が他にあるからと、いとも簡単に誘いを断っていた。
「まあ、この辺が表と裏の差なんだろうけどな」
実は、蒼介は拓弥と実力も成績も互角なのだが、拓弥は超が付くいわゆる『陽キャ』な上にオレ様な性格で、自然と彼の方がエースとして周囲に認められ、裏返しで蒼介が裏エースなどと呼ばれていた。
「そういえば、やっぱり拓弥はもうセックスしてるのかな？」
元々こういう部活後の遊びは拓弥が言い出すことが多かったのに、夏休み以降、急に付き合いが悪くなって、週に何回かは部活が終わると明らかに浮かれた様子ですぐに帰ってしまう。
急に金回りが良くなったという話もあり、年上の恋人でもいるのではと噂になっているが、そうでも不思議ではないイケメン君だ。
「あ、やべっ」
拓弥の彫刻のような完璧な裸体を思いだし、さらに股間が熱くなる。

De
メリット
BODY SOPE

「ちんちんデッケぇ〜！」
遠慮のない男児の大きな声が露天風呂に響き渡る。
男児が指さす先には、露天風呂の岩に腰掛けて右足の膝を立て、左足だけ湯に浸けた少年が大股開きでチンポを晒していた。
照明に照らし出された少年の肉体は、鍛え抜かれた筋肉が全身を覆っていて、形の良いボリュームのある大胸筋に乳首が乗り、艶やかなシックスパックにカッコいい臍がアクセントをつけ、下腹には萎えチン状態でも明らかに太くて長いズル剥けペニスと重量感のある金玉がぶら下がっていた。
「おうっ！デケーだろ。でも本当はもっとデカくなるんだぜ？」
男児に指をさされた意志の強そうな太眉のイケメン少年は、まったく動じることなくチンポを晒したまま、朗らかに笑いながら言う。
「こらこら、子供に下ネタ振るんじゃねえよ」
隣の友人が呆れ気味に諌める。
「こんなの下ネタじゃねえって」
「いやいやお前さ、じゃあ見せてやるって勃たせるつもりじゃん」
「ねえよ！」
「本当に？これっぽっちも？」
「まあ、一瞬思ったけども」
「やっぱりじゃねーか！」
少年二人のコントの間も、男児は興味津々な目で巨根少年を見つめていて、二人の会話が途切れるのを待って声をかけてくる。
「ねえねえ、ちんちんデカいにいちゃん！ひょっとして、あのカラテダンスのコーセーくん？」
「おっと！バレちゃったな！ああ、俺がコーセーだぜ」
「マジで？やったあ！すげ〜！」
男児は露天風呂の中でバシャバシャとはしゃいで暴れた。
ちんちんがデカいにいちゃん、こと佐久間皇成は武野虎学園高等部二年生で空手道部の主将だ。
実力と実績ともに有力な選手なのだが、つい最近、部活仲間と冗談半分で動画配信を始めたら、空手の演武をダンス風にアレンジして流行曲に合わせて踊る動画がいきなりバズって『ダンスのコーセーくん』として顔が売れてしまっていた。
しかも、なぜか小さな子供達に大人気になっているのだ。
「やべえ〜！あのこーせーくんのちんちん見ちゃった！」
やっぱりチンポに興味がいく男児はテンションマックスだ。
「あっ！やっぱ、見たことはないしょにしたほうがいい？」
ハッと何かに気付いたらしい男児は、気持ち小声で聞いてくる。
最近は、小さな子供でもイロイロとハイリョするのだ。
「いいや？別にいいぜ。コーセーのちんちんはデカくてカッコ良かったって言いふらして構わねえよ」
「カッコいいってなんだよ！」
間髪入れずに友人から突っ込みが入る。
「うん！そうする！」
男児は嬉しそうに大きな声で返事をすると、バシャバシャと露天風呂の中を友達のいるらしい方へ去っていく。
このやり取りの間にも一切チンポを隠す素振りを見せない皇成に、友人は微妙な顔をして小声で囁く。
「なあ皇成、ひょっとして、このスーパー銭湯で好みの男の子を釣ろうとしてるのか？そのチンポは釣り竿なのか？」
友人の言葉に、皇成は苦笑する。
「ねえよ！っていうかその発想はなかった。マジで。今日は単純に皆と大会の打ち上げに来ただけだぜ」
「そうか。すまん」
バツが悪そうに友人は謝る。
「謝ることはねえよ。むしろその手があったか！って感じだ」

「おいおい！」
友人は突っ込みながら苦笑し、わざとらしくため息をつく。
「天は二物を与えず、どころかイチモツに加えて二つも三つも四つも五つも与えられて羨ましい限りだぜ。デカいチンポに、イケメンな顔、完璧な肉体、抜群の運動能力、頭も良い、さらにはお金持ちのお坊ちゃんだ。しかもそれをフルに生かして好みの男の子を食い散らかす！」
「まあな！」
皇成は友人のかなり突っ込んだ妬みに笑顔で返す。
このやり取りが問題無いくらいに、この友人とは腹を割った仲だ。
「食い散らかすは否定しなさい」
逆に友人に突っ込まれる。
「まあでも、俺だってその代わりに普通の高校生にはありえない、重くてヤバイいモノを、イロイロと背負わされてるんだぜ？」
「お坊ちゃんも大変だな」
「おう」
皇成と友人は苦笑し合う。
「ところで皇成、お前、男の子百人とヤッたってマジか？」
空手道部の中ではそういう話になっている。
「ムチャ言うな、百人はさすがに無い！」
皇成は不服そうに即答する。
「二十二人だよ。しかも全員ほぼ一回だけで、多くても二回だ」
十分凄い人数だが、なぜか少なく感じてしまうのはなぜだろう。
「しかも、全員俺のほうが振られた。食い散らかすなんて濡れ衣だ」
そう言って口を尖らせる皇成に、友人は肩を竦める。
「まあ、お前はガチのサドだからな。お前の性癖を全部受け止められるのはガチのマゾだけだろ。それがなければ、お前に抱かれてもいいってヤツは部内にも結構いるぞ？後輩はもちろん、二年や先輩にもさ。一年の鏑木や三年の支倉先輩なんて、超美少年でお前好みじゃね？」
「ただセックスするだけじゃヤダ。ガッツリ嬲りたい。あと、部長として、部員には手を出さないという一線は守りたい」
「はいはい。この贅沢者め」
友人は軽く笑いながら手を振り、洗い場に向かった。
それを見送った皇成も立ち上がり、露天風呂から屋内へ足を向ける。
「あ～あ、あった瞬間にビビッと雷に打たれるような、俺好みのすべてを兼ね備えた男の子と、運命の出会いはねえかなぁ！」
苦笑しながら、小さく、しかしハッキリと声に出してそう呻いた。

「アイツらどこかなぁ」
ようやく勃起を鎮めることに成功した蒼介は、洗い場から出て、先に行った部活仲間を探して露天風呂に向かうことにする。
タオルは腰に巻かず肩にかけて、十分に立派なサイズと言える半剥けの萎えチンを堂々と晒して揺らしながらのんびり歩く姿は、照明の具合から、まるでライトアップされたステージを全裸で歩くようだ。
くせ毛気味の髪と目鼻立ちが整いながらも可愛い顔に、よく鍛えられたスタイル抜群の肉体は下手な芸能人よりエロいのだが、本人にそういう自覚はまったくない。
実は『裏エース』というあだ名には、肉体の性的魅力という意味でもエースの拓弥と互角なのに、まったく生かしていないという意味も含まれているのだ。
つまり、蒼介を悩ませている『チンポを（裸体を）見られている』という妄想は、部活内に限ればあながち妄想ではない。
蒼介に性的欲望を抱く部活仲間は少なくないのに、蒼介自身が鈍感すぎて気付いていないだけだった。
そして本人は今日も『地味な自分の人に言えない性癖』に悶々と思いを巡らせて、妄想を暴走させて不安を募らせていた。

「今日は大丈夫そうだけど、コレからどうしよう…」
これからの人生でスーパー銭湯や温泉を避け続けることはたぶん不可能だし、そもそもそれだけで済む保証もない。むしろ、どんどん悪化していく可能性が高い。
いつでもどこでも妄想が暴発したり、ついには欲求を我慢できなくなってガチで露出行為をやらかしてしまう自分。
怖い想像に嫌な汗が出て、同時にまたチンポに血液が集まっていく。
「あっ、こりゃダメかな」
自分自身の破滅の妄想にまで勃起しかかる自分に、絶望と諦めと開き直りを同時に走らせて思わず苦笑する。
「いやいや、まだ諦めるな。上手く付き合っていくしかない！」
そして、思い直してなんとか対策しようとするという思考パターンを最近は定期的に繰り返している。

毎日いつでもというワケではないが、今日のような明確なきっかけがある日以外でも、ふとした瞬間に思い出して感情がアップダウンするのはかなりのストレスになっていて、このままではいつかマジで暴発するのでは、という予感に焦りを感じてもいる。
『ちんちんデッケぇ～！』
露天風呂の方から男児の大きな声が響いてきて、蒼介は我に返る。
「…え？ちんちん？」
気が付けば考え込んだまま露天風呂の入り口まで来ていた。
「まあいいや、とにかく今日は上手くやり過ごして、さっさと帰ろう。まずはアイツらを見つけて、できれば先に帰らせてもらおう」
目先の行動を決めて気が晴れた蒼介は、露天風呂のドアを開けた。
「うおっ、寒いィ～！」
噴き出す冷気を全身で浴びて震えながら露天風呂に出る。

「おっ、思ったより本格的だな」
本物の岩を使った岩風呂風の露天風呂は、広さもあって解放感があり、冬の冷たい外気に温泉の湯気が乗って漂っていた。
「すげー！橋まである」
ライトアップされた庭園風の橋を、蒼介は岩風呂全体を眺めながらゆっくりと足を進める。
「…あっ」

岩陰から突然現れた人物に、蒼介の目は釘付けになる。
光の強い瞳と太眉が印象的なイケメン男子で、アクションスターのような完璧な肉体と、目の覚めるようなズル剥け巨根！しかも跳ね上がるように勃起する瞬間を見てしまったのだ。
そして股間に電撃が直撃したように自分も勃起してしまう。

「…えっ」
屋内の浴室から露天風呂に入ってきたくせ毛の少年を見て、皇成は目を見張って絶句する。
派手さは無いが綺麗に整った可愛らしい顔に、バランスよく鍛え上げた艶めかしい肢体の少年は、皇成の理想が全裸で歩いているようなものだった。
しかし、それ以上の何かを確かにこの少年に感じている。
まさに雷に打たれたように衝撃を感じ、全身の血が沸き立って心臓がバクバクと早鐘を打つように激しく動く。
そして股間に熱いものが集まって一気に完全勃起し、勢いよく亀頭が下腹を叩いた。
『うお、マジかぁ』
皇成が金縛りにあったように見つめていると、相手の少年もほぼ同時にこちらに気づき、驚いた顔で皇成を見ながらポンと半剥けペニスを勃起させたのだ。
そして二人はお互いに見つめ合ったまま、完全勃起したチンポを揺らしながら固まった。

先に動いたのは皇成だった。
『行くしかない！』
皇成の頭の片隅では、ここがスーパー銭湯だ、公衆浴場だと理性的な思考が残っているものの、本能が理性を蹴散らした。
しかし、駆け寄っていきなり抱きしめる事はなんとか我慢し、ゆっくりと、くせ毛半剥け少年に近づいていく。
「…っ」
くせ毛半剥け少年は皇成の動きに気付いて一瞬体を強張らせたが、逃げようとはせず、頬を上気させた表情のまま、熱いまなざしで皇成を見つめ続けている。

巨根のイケメンが自分に向かって歩き始めた瞬間、蒼介の心臓はドカンと跳ねたが、なぜか逃げようという気持ちにはまったくならず、むしろ舞い上がるほど嬉しいという感情で胸がいっぱいになった。
頭の片隅では、見知らぬイケメンが完全勃起したズル剥け巨根をぶらんぶらんと揺らしながら近づいてくるのはヤバいのでは？と冷静に突っ込む自分もいるのだが、全身に満ちた歓喜の感情と股間でガチガチに完全勃起して揺れてるペニスが蒼介のカラダを支配している。
「あンっ！」
「おゥっ！」
皇成の長くて太いズル剥け勃起ペニスが、蒼介の体格的には十分立派なサイズだが半剥けの勃起ペニスに接触して、二人同時に声が出る。
そのくらいの距離まで近づいて二人は向き合って見つめ合う。
「…っ」
二人は勃起ペニスを絡め合ったまま、相手のペニスの熱い体温を感じながら、無言でたっぷり一分以上は見つめ合い続けた。
それから、皇成は無言のまま右手で蒼介の左腕を優しく掴み、さらに硬く勃起したペニスのズル剥けの亀頭を蒼介の下腹に押し付けた。
「…ん」
蒼介は甘い声を漏らしただけで、それを素直に受け入れる。
その反応を確かめてから、皇成は口を開いた。
「君とセックスしたい。俺のコレを君のアナルに根元までぶち込んで一番深いところで射精したい。いいか？」
あまりに直接的な言葉に蒼介は目を見開くが、ほぼ間髪入れずに小さく頷き、それから口を開いてはっきり答える。
「…はい。オレでよければ」

「どうしちゃんたんだろオレ」
蒼介は脱衣所で体を拭きながら、なかば呆然として呟く。
見知らぬ男に、とんでもないことを求められたのに、ほとんど脊髄反射で受け入れてしまったのだ。
しかもその答えにまったく後悔はなく、いまもジワジワと嬉しさが込み上げてくる。
「でも、オレ、セックスなんてできるのかな？」
自分の性癖への悩みとオナニーしか考えてなかった蒼介は、誰かとセックスするという妄想は、じつはほとんどしていなかった。
「なんだ、まだ着てなかったのか」
高校の学ランをきっちり着込んだ皇成がもう現れて、少し驚いた顔でそう言ってからニヤリと笑った。
「ああ、そのままでいいか」
「へっ？」
戸惑う全裸の蒼介を、皇成はいきなりお姫様抱っこする。
「ええっ？ちょっ！」
そしてそのまま、全裸の蒼介を大勢の一般客がいるスーパー銭湯のロビーに連れていってしまう。

冬の銭湯
ちんぽなべ看

「ひえぇっ！」
あまりの事に絶句して慌てる蒼介にかまわず、皇成は涼しい顔でフロントの店員に説明する。
「友人が急に具合が悪くなったので、このまま車に乗せます。会計は彼が全部やりますので」
露天風呂でぶっちゃけトークをしていた皇成の友人が、まだスーパー銭湯の館内着姿のまま、苦笑しながら手を上げた。
そして、その横では蒼介の部活仲間達が笑顔で手を振っている。
驚く蒼介に気付いた皇成は、小声で蒼介に耳打ちする。
「彼らは露天風呂で俺達を見てたよ」
皇成はショックでフリーズする全裸の蒼介を抱いたまま、まるで大勢の一般客に見せびらかすようにして黒塗りの車に連れ込んだ。

「なんでこんなっ！」
車が走り出したところで、ようやく我に返った蒼介は皇成に抗議するが、全裸のままではどうにも強く出にくい。
「ごめんごめん。でも良かっただろ？」
まったく悪いと思ってない様子の皇成はニヤリと笑う。
「えっ？」
君、俺の腕の中で勃起ペニスをビクンっビクンっ！ってさせながら嬉しそうに興奮してたよね？好きなんだろ？こういうの」
「あっ…」
皇成の指摘に蒼介は言葉が無い。
そして、全裸の蒼介を乗せた車はすぐに何処かの建物の駐車場に滑り込み、蒼介は再び皇成に抱きかかえられて、その駐車場から直接エレベーターでつながった豪奢な部屋に連れ込まれた。
「ここって、やっぱり？」
蒼介の言葉に、皇成は学ランを脱ぎながら答える。

「ああ、いわゆるラブホテルだ。そうそう、君の服や荷物も回収してあるから安心してくれ」
慣れた感じの皇成に比べて、文字通り生まれて初めてラブホに、それも全裸のまま連れ込まれた蒼介はキョロキョロと落ち着きがない。
そして、部屋の中に用意された『道具』に気付いて慌てる。
「あの！オレ、ラブホって漫画とかでしか見たことなくて、こういう、あの、道具が置いてあるって普通なんですか？」
蒼介が連れ込まれた部屋は、豪華な照明に大きくて派手なベッド、そして数々のＳＭグッズや器具が用意された部屋だった。
「いいや、普通はここまでガチのＳＭグッズは無いよ。ここはＳＭプレイ専用の部屋だからね」
皇成はサラリとヤバイことを言う。
「…え？」
顔が強張る蒼介に、皇成はおだやかに語り掛ける。
「俺はいわゆるサドでね。好きな子を拷問して嬲って犯したいんだ。もちろん、本当に怪我をさせたり壊したりは絶対にしない。あくまでプレイとしてだよ」
皇成の言葉を蒼介は頬を赤らめて反芻する。
「拷問して嬲って…」
蒼介自身は気付いていないが、すっかり萎えていた蒼介のペニスが再びビクンと勃起し始めているのを皇成は見逃さなかった。
「でも、今日はコレとカメラだけだ」
皇成は浣腸器を持って極上の笑顔で笑い、そのまま蒼介を抱き寄せると、まっすぐ目を見ながら熱い言葉で酷いことを言う。
「どのみちアナルセックスには必要なことだ。ただ、それを君を嬲って辱め、人権を剥奪するプレイとして行うんだ」
「…人権を、剥奪っ」
皇成の言葉に蒼介は生唾を飲み込む。

「ああそうさ。この浣腸器でキツい浣腸液を二リットル君のアナルから注入する。そして、アナルに栓をしてたっぷり十五分以上、君が苦痛に悶絶する様子を楽しんでから、公開で『出す』ショーをさせる。しかもそのすべてを高画質カメラで撮影するんだ」
熱く語る皇成の言葉に蒼介の頬は上気し、チンポは完全勃起する。
そして、皇成は蒼介を見つめたまま直球を投げ込んだ。
「君に浣腸させてくれ。そして俺の前ですべてをぶちまけて、人としての尊厳を捨てて俺の肉奴隷になってくれ」
「…はい。やってください」
蒼介は、熱に浮かされたような顔で即答した。

なぜ受け入れてしまったのか、蒼介は自分自身が理解できなかった。
いや、本当は分かっているが理性が認めるのを拒否しているのだ。
「じゃあ、やるぜ」
皇成の言葉に、蒼介は小さく頷く。
確かな事は、今、蒼介はラブホテルの大きなベッドの真ん中で、何台もの高画質カメラに囲まれながら、全裸でアナルを天井に向けて差し出していて、そのアナルに二リットルもの浣腸液が詰まった浣腸器の先端が挿入されている事と、ソレを自らの意思で受け入れたという事実だ。
「あああっ！」
冷たい浣腸液が一気に蒼介の腹の中に注入されていく！
「んんんぁん！」
自らが堕ちていく感覚に、蒼介は嬌声を上げながら精液を漏らした。

「初めての浣腸と公開でぶちまけた感想は？」
全てを終えて呆然としている蒼介に露骨に尋ねる皇成の声は、実は意地悪なものでは決してなく、むしろ、布教した漫画が面白かっただろう、良かっただろう？と期待に満ちて聞くソレだった。
そして、聞かれた蒼介は、頬を染めて小さく呟く。
「…良かったです。すごく」
そう言ってしまう自分に蒼介はショックを受けているが、同時にものすごく晴れ晴れとした気持ちになっていた。
妄想ではなく実際に体験したことで、しかも妄想以上に快感だった事でようやく吹っ切れた気がする。
「オレ、やっぱり露出狂なんですね」
「えっ？違うよ？」
しみじみと告白した蒼介の言葉を、皇成は速攻で否定する。
「へっ？」
きょとんとする蒼介に、皇成は子供に教えるようにやさしく丁寧に説明し始めた。
「君はマゾヒストだよ、間違いなく。確かに露出癖もあるようだけど、君の場合それもマゾヒズムの一部になっているだけさ。『見られる』ことに快感を得ているわけじゃなく『見られて辱められている、精神的苦痛を感じている自分』に快感を得ているんだ」
「えええ？」
思いもしなかった指摘に、蒼介は戸惑って目を白黒させる。
そして皇成はやさしい声音で怖いことを言う。
「まあ、慌てることはないよ。これから俺が段階を踏んでじっくり嬲って痛めつけて、カラダに分からせてやるからさ」
その言葉に期待に満ちた目で生唾を飲み込む蒼介に、皇成は今度はちょっと意地悪な口調で通告する。
「でも、今日はここまで。まずは普通にセックスしよう。君のアナルバージンをコイツでブチ破るぞ」
皇成は勃起したズル剥けのペニスを蒼介の顔に叩きつけた。

ゴクッ

「これが普通のセックスなんですか？」
涙目の蒼介は、口に銜えた皇成の巨根を外して困惑した声でそう尋ねると、すぐに再びデカイ亀頭にかぶり付く。
蒼介はいまベッドの上で全裸のまま両膝をレザーと鉄鎖でM字開脚に固定されてアナルを晒し、そのアナルの前の一台のほかに五台の高画質カメラに囲まれながら、皇成の完全勃起したズル剥けペニスを右手で掴んで口いっぱいに頬張っている。
「いや、これは俺の趣味だ。アナルバージンを奪う男の子に、自分を犯す、自分のアナルにぶち込まれる肉棒の大きさと熱さをはっきりと認識させて、恐怖と苦痛を最大限にするためさ」
皇成の言葉に蒼介は頬をさらに染めて、半勃起のペニスからはダラダラと精液を垂れ流す。
そして、すでに潤滑剤をたっぷり塗り込まれ、三十分以上揉み解された蒼介のアナルはテカテカに光っていて、不規則にクパクパと艶めかしく蠢いていた。
それらを撮っているすべてのカメラの画像が表示されるタブレットを見て、皇成は嬉しそうにニカっと笑った。
「ははっ！最高だ！いままでの男の子は全員が、こうして俺のやつを握って銜えると、そのデカさにビビッて萎えて身を固くしたのに、君は喜び勇んでアナルを自分で広げてくれるんだな！」
蒼介は皇成の亀頭を頬張って口内で嘗め回しながら、開かれた尻を自分の手でさらに開いてアナルを突き出しているのだ。
『早く、コレをお尻にぶち込んで欲しい！』
蒼介の頭の中には今、それしかない。
「わかっているのか？いくら十分に揉み解したアナルでも、初めてのセックスでこの巨根をぶち込まれたら、普通は快感よりも悪夢のような苦痛が大きく上回って襲うんだぞ？」
皇成の亀頭を銜えたまま蒼介はコクコクと頷いた。

「じゃあ、お望み通り一番酷いやり方で処女アナルをブチ犯すぞ」
拘束をすべて解かれた蒼介は、ベッドに浅く腰掛けて横になった全裸の皇成の股間を跨いで立たされる。
その蒼介のアナルの直下には、ますます硬く勃起して屹立した皇成のズル剥けペニスが天を仰いでいた。
「俺だって初めての男の子にはいつも優しく挿入してやるんだぜ？でも、人生でたった一度のアナルバージン喪失だからな。ガチマゾの君にとって最高のロストバージンにしてやるよ」
そう言って皇成は蒼介の腕を掴んで引き下ろし、自分の亀頭を蒼介のアナルに押し付ける。
「ガチマゾの変態くん、君のアナルバージンは、今日会ったばかりの見知らぬ男に無造作に奪われるんだ！」
言い終わる寸前に、皇成は蒼介の両足を払って自分の勃起ペニスの上に蒼介のアナルを乱暴に落とした。
「あああああああああンっ！」
見事に全体重をかけて皇成のペニスに串刺しにされた蒼介は、腹の底から艶めかしい嬌声を叫び、噴き出すように射精した。
「ははっ！最高だ！このマゾガキめ！」
皇成は弾けるような笑顔で叫び、そして何かに気付く。
「そういえば、まだ名前を聞いてなかったな。俺は、佐久間皇成、武野虎学園高等部二年生で空手道部の主将だ。真正のサドで変態だ。君もカメラに向かって自己紹介しろ！」
すっかり目がイッてしまっている蒼介はアヘ顔を晒してピースまでしながら喘ぐように叫ぶ。
「オレは！柳本蒼介、筍学園中等部硬式バドミントン部の二年生で、ガチのマゾでド変態ですゥ！」
言い終わる寸前に、蒼介の完全勃起した半剥けペニスから、さらに勢いよく精液が噴き出して弧を描いた。

8K

「今日も長かったな、校長の話」
クラスメートのうんざりした口調の言葉に、蒼介はニヤリと笑う。
「オレ、計ってた。マジで今年最長記録更新だ」
「うげえ、もう法律で規制しろって！」
蒼介も全面的に同意だ。
「まあ、でもこれで冬休みだ！短いけどな！」
クラスメートの声は解放感が溢れまくっていた。
今日は終業式でクリスマスイブ。短いながらも長期休暇の始まりだ。

蒼介の衝撃的なロストバージンから約一か月。
全裸拉致を目撃された部活仲間からの厳しい追及には、ある意味正直に彼氏ができたと（目いっぱいもったいぶってから）告白した。もちろん、サドとマゾの変態カップルという事実は隠してだ。
部活仲間達は、彼氏ができた事と性的関係を認めたことで満足し、それ以上の追及は無かった。
むしろ、部活後の遊びに付き合いが悪くても訳知り顔で許してくれるようになって助かっている。
そう、蒼介は皇成と出会ったあの日以来、週に二回から三回は会ってセックスをしていた。もちろんＳＭプレイもだ。
ただし一番最初に皇成自身が言ったとおり、段階を踏んで少しずつということで、まだ大したプレイはしていない。
そして『彼氏』という単語には実はまだ蒼介は抵抗がある。
むしろ『ご主人様』と『性奴隷』だと思っている。
「…オレは、たぶん、好きなんだけど…」
皇成にとって自分がどういう存在なのかは、自信が無い。
「そうすけ？」
思わず物思いにふけっていた蒼介にクラスメートが声をかけたところで、ちょうど蒼介のスマホが鳴った。

「あ、悪い」
蒼介が慌ててスマホを見ると、まさに皇成からのラインだ。
皇成：五時に迎えに行くから全裸待機な
蒼介：了解しました
内容はともかく、シンプルなやり取りの後、蒼介はちょっと迷ってからスタンプも追加する。
かわいい犬が敬礼をしているヤツだ。
直後に、皇成から追加の『命令』が届く。
皇成：首輪と金玉紐を忘れるなよ
蒼介：はい！
蒼介は即答して、そしてさらにスタンプを追加する。
同じ犬が嬉しそうにしっぽを振っているヤツだ。

蒼介は立場と気持ちをスタンプに託しているつもりだ。
ご主人様が大好きな犬。言われたことは何でも嬉しい。
ご主人様も自分を大事にしてくれる。
でもご主人様がどこまで自分を思ってくれているかは、実は、まだよくわからない。
「…そうすけ、言いたいことは言わないと相手には伝わらないぜ」
あの日のスーパー銭湯でも一緒だった、クラスメートで部活仲間でもある友人は、スマホを見つめて微妙な顔をしている蒼介に心配そうに忠告する。何かとカンの良い男なのだ。
「あ、うん、サンキュ！大丈夫だよ」
皇成からは、今晩から年明けまで家には帰さないと言われている。
きっと、今までしなかった凄い事をされるんだろう。
そうすれば、きっとご主人様の本音もわかるはずだ。

今日
5時に迎えに行くから
全裸待機な
11:45
了解しました
既読
11:47
首輪と金玉紐も忘れるなよ
はい!

「うん、我ながら超が付く変態だな」
全身が映る鏡の前で、蒼介は満足げに頷く。
鏡の中では、蒼介が全裸に犬の首輪を装着し、勃起してぼぼ剥けになったペニスの根本と陰嚢の根本をそれぞれレザーリングで縊って、二つ合わせて犬用のリードを繋いである。
今日は、この恰好のまま連れ出されるのだ。
ガチの屋外露出は出会ったあの日以来だった。しかもあの時は体裁的にはアクシデントを装っていたが、今回は人に見られたら言い訳しようがない恰好だ。
「でも、すごく嬉しいのは、やっぱオレ、マジでご主人様の事を好きになっちゃったんだなぁ」
この首輪と金玉紐と呼んでいるチンポに繋ぐリードは、出会った翌日に皇成から渡されたもので、
『いつかコレを着けて全裸で屋外を引き回すから覚悟しておけよ』
皇成はそう言って笑っていたのだ。
貰った時には冗談じゃないと青くなったのに、今はご主人様に使ってもらえる、嬲ってもらえることが本気で嬉しい。
本気で、ご主人様が喜ぶならどんな過激でヤバイことでも全部を受け入れることに躊躇が無くなっている。
「そろそろかな」
と思った瞬間に玄関のインターホンが鳴る。
両親は仕事で年末年始と不在だと伝えてあるので、いつもは蒼介の住むマンションの外からスマホで呼び出しだが、今日は玄関まで迎えに来てくれた。
「うん、似合ってるぜ」
玄関のドアを開けて蒼介の姿を見た皇成の第一声だ。
「ちょっと寒いけど、マジでそのまま行くぞ。非常階段からだ。来い」
そう言って皇成はドアを大きくあけた。
そして、蒼介の家の玄関のすぐそばにある非常階段までの間を廊下から隠すように体を入れる。
「はいっ」
蒼介はためらわずに玄関から出て非常階段に飛び込んだ。
「はいコレ」
蒼介に続いて皇成も非常階段に入ると、蒼介は自分のペニスと陰嚢に繋がったリードを皇成に差し出す。
非常階段の照明は思いのほか明るく、靴と首輪以外は全裸の男子中学生の肉体を余すところなく照らし出していて、寒さで白い息や、赤らめている頬、そして勃起したほぼ剥けペニスから垂れ堕ちる透明な粘液まで艶めかしく魅せていた。
「そうすけっ、今のお前は凄く綺麗だ」
茶化しではなく本気で皇成は蒼介を褒めたたえ、高画質のジンバルカメラを向けて撮影する。
蒼介はさらに頬を赤らめるが、しばらくは黙って撮影され続ける。
そして皇成が満足したところで、蒼介は思い切って口を開いた。
「あの、コレ、クリスマスプレゼントです。ベタだけど、このリードが、…オレ自身がプレゼントってことで…。もともとご主人様のモノだけど、マジでプレイじゃなく、オレのカラダを頭の先から足のつま先まで、髪の毛一本、チン毛一本、精液一滴まで、全部、貰ってください。もちろん人権もいりません。このリードをご主人様が手に取った瞬間から、マジでオレはご主人様の所有物になります」
蒼介は首まで真っ赤になりながら一息で言った。
「そうすけ、蒼介っ」
皇成は蒼介の名を呼び、歓喜に満ちた顔でリードを受け取り、そのまま蒼介を抱きしめた。

マンションの非常階段で強く抱き合ったあと、皇成は上機嫌で全裸の蒼介を引き回してから、車に乗せた。
金玉紐をグイグイと引いて蒼介の金玉を痛めつけながら、非常階段を蒼介の家がある八階から一階まで降り、さらにそのままマンション裏の公園を一周してしまったのだ。
「さすがに冷たくなってるな。大丈夫か？」
高級車の後席で、隣に座らせた全裸の蒼介の肩を抱きしめながら心配そうにのぞき込む。
蒼介は黙ってコクリと小さく頷くが、さすがにムチャだったようだ。
「悪い。嬉しすぎて調子に乗り過ぎた」
本当に後悔している様子の皇成は、学ランを脱ぐと蒼介を自分の膝にのせて抱きしめる。
「着くまで、少しでもな」
皇成に耳元で囁かれて、蒼介は頬を染めて嬉しそうに目を閉じる。

「あの、ここは？」
皇成と蒼介を乗せた車はいつものラブホではなく、見知らぬビルの地下駐車場に入っていく。
「今日のために用意したパーティー会場さ」
蒼介の疑問に皇成は悪戯っぽく笑う。
そして車から降ろされた蒼介は皇成に金玉を引かれてエレベーターに乗せられ、ビルの最上階にある部屋の前に二人で立った。
「ご主人様？」
不安を隠せない蒼介に、皇成は自信に満ちた声で囁く。
「蒼介、コレは俺からのクリスマスプレゼントのつもりだ。驚くだろうけど、俺を信じて楽しんでくれ」
「っえ？」

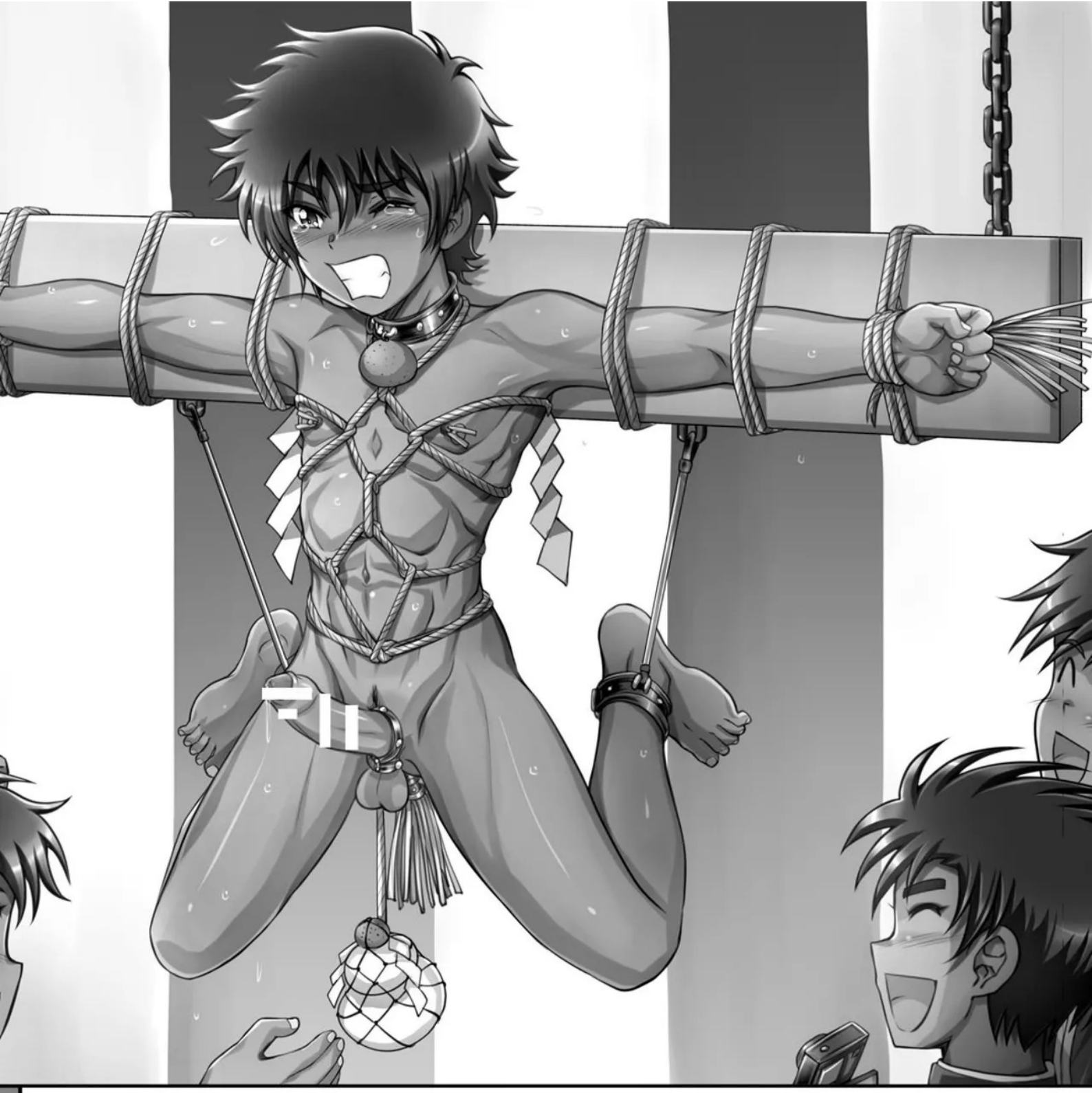
まだ戸惑っている蒼介に構わず、皇成はドアを開けて中に入る。
「ええっ！」
部屋の中には皇成と同じ学ランを着た男が大勢いて、全員が一斉にこちらを見ていた。
蒼介は自分の全身からザーッと血の気が引く音が聞こえた。
同時に股間でほぼ萎えていたペニスがボンっと跳ね上がり下腹をバチンと打つ音がリアルに鳴った。
「ははっ！さすがだな。さあ、みんなに紹介するよ」
そう言って皇成は蒼介の金玉紐を引いて、さらには右手を掴んで強引に部屋の真ん中に蒼介を連れ出す。
するとあっという間に二十人以上の学ランの男達に囲まれてしまい、蒼介はプチパニック状態になる。
「ご、ご主人様ぁ」
思わず漏らした蒼介の一言に、取り囲んだ学ランの男たちは一斉にドッと沸き上がって囃し立てる。
「おおっ！マジでご主人様って言ったぞ！」
「スゲーマジだ」
「こんなカワイイ子だとか羨ましい～！」
自分一人が全裸のままで大勢の人間に見られ話題にされるという、かつて妄想しまくった状況に突然放り込まれた蒼介は、暴走するペニスを制御することが全くできずに、失禁するような感覚でイキナリ噴き出すような射精をしてしまう。
「ああっ！」
そしてそれを見た男達はさらに盛り上がっていく。
「おいおい、お前ら、蒼介が怖がっているじゃねえか！」
そう言いながら皇成は蒼介を庇うように抱きしめる。
「蒼介すまない、さすがに驚かせ過ぎたかな。大丈夫だぜ、こいつらは俺の部活の仲間達で全部事情を分かってる連中さ」

皇成に抱きしめられ、ゆっくり噛んで含めるように言われた蒼介はようやく状況を理解して落ち着きを取り戻す。
「…あ、はい、すいません」
とは言え、いきなり射精はさすがに自分でもドン引きで、快感よりも羞恥が先にたってさらに赤面して俯いてしまう。
そんな蒼介を見て皇成は満足そうに笑った。
「さあ、皆。あらためて紹介するぜ！俺がついに手に入れた最高の、理想通りの！夢のような！性奴隷、柳本蒼介だ！ちなみに筍学園中等部硬式バドミントン部の二年生で裏エースとしても有名な有力選手だ」
囲んだ部活仲間達から拍手が沸き起こる。
そして同時にヤジも飛ぶ！
『コーセー浮かれすぎ！』
『羨ましい！ちんちんもげろ！』
『部長ぉ！おれも性奴隷にしてくださあ～い！』
『えぇ～こーせーくんの性奴隷は俺達全員じゃなかったのぉ～』
追って、大爆笑。
でも雰囲気は暖かくて蒼介を茶化すような声は皆無だ。
皇成との関係と性癖を必死に隠している蒼介にとっては理解を超えた状況で、ただ茫然としてしまう。
「蒼介、あらためて紹介するぜ。俺が主将を務める武野虎学園高等部の空手道部の仲間達だ。俺の性癖や男の子遍歴も全部知ってる」
誇らしげに紹介する皇成は改めて説明を付け加えた。
「こいつらなら、知らない人間に痴態を見て欲しい、っていう蒼介の妄想を実現できると思って、今日集まってもらったんだ」
信じられないという顔をする蒼介に、部活仲間の一人が苦笑気味に口を出す。蒼介と皇成が出会ったスーパー銭湯で会計を肩代わりした男だが、蒼介は覚えていない。
「スゲー話だけど、本当だよ。今日は安心して痴態を晒してくれ。俺達もめいっぱい楽しませてもらうし、オカズとして全部撮影させてもらうけど、秘密は守る。万が一破ると主将にガチで金玉潰されるのでそこは絶対だ」
そして、ニヤリと笑って付け加える。
「マジで君のことは部員全員が大歓迎だ。この主将様はめいっぱい自分の性癖は叫んでおきながら、自分の部の部員には手を出さないとか言って他所の部員を食い散らかしてクレームが凄かった。ようやく本命を捕まえてくれて良かった」
皇成は全肯定でニカっと笑う。
「まあな！もう大丈夫だぜ」
当然、他の部員からはブーイングの嵐が襲う！
「まあそんな訳で、今日は蒼介のお披露目とクリスマスプレゼントを兼ねて、武野虎学園高等部空手道部のクリスマスパーティーと忘年会さらに新年会を一緒にやることにした。その余興として、蒼介、お前のカラダを拷問して遊ぶから覚悟しろ」
皇成の宣告に、蒼介はペニスを完全勃起させて応える。
「はい、オレのカラダで良ければ使ってください」
「初めての三角木馬はどうだ？」
右手で蒼介の右乳首を摘み嬲りながら、皇成は楽しそうに尋ねる。
「想像以上に痛くて苦しいです」
頬を上気させながら答える蒼介の声は艶やかだ。
余興として全裸で三角木馬に乗せられた蒼介は、両腕を頭の後ろで拘束されていて、その腕を天井からの鎖で吊られた体勢のまま全身を電飾やアクセサリーで飾られて人間クリスマスツリーになっていた。
勃起した半剥けペニスにも電飾が巻き付けられ、尿道口には小さな光源が挿し込まれて光っている。

「そうか。もっともっと苦しくしてもらおうな」
そう言って皇成が蒼介から離れると、部員全員が列を作って蒼介と記念写真を撮り始めた。
「主将、本当にいいんですね？」
トップバッターのおそらく一年生な部員は皇成に念を押す。
「ああ、身動きできない蒼介のカラダをめいっぱい嬲ってやってくれ」
ただし、ただ撮影するだけではなく蒼介の肉体に悪戯をするのだ。
「んあああああっ！」
一人目に金玉を馬の背の鉄板に押し付けられて蒼介は悶絶する！
二人目は乳首を噛み、三人目は抱き着いて木馬の背に全体重を乗せ、四人目は木馬を激しく揺らし、五人目は亀頭の皮を剥いて嬲る。
その都度、蒼介は悲鳴と嬌声を上げて悶え、ペニスからは透明な粘液をだらだらと零し続けた。

「おまえら、俺の蒼介にずいぶん好き勝手してくれたなぁ？」
二十人以上の部員全員に嬲られて消耗した蒼介を三角木馬から降ろしながら皇成は苦笑気味に笑う。
「だって蒼介くん最高にカワイイし！いっそ、空手道部の共有性奴隷になってもらって、っていうのはダメっすか？」
一年生の軽口に他の部員達も歓声で賛同する。
「…っ」
萎えていたペニスがボンっと跳ねた蒼介は顔を赤くして俯く。
「…蒼介、お前、今、それっていいかも！とかちょっと思ったな？」
皇成は蒼介の顔を上げさせて剣呑な目で睨む。
「あ、ごめんなさい」
思わずガチで謝ってしまった蒼介に皇成は一転してニヤっとすごく悪い顔で笑った。
「コレはやっぱりおしおきだな！」

「いいね！最高だぜ蒼介」
全裸のまま荒縄で亀甲縛りにされて両腕を天井から鎖で吊られ、さらに両足をレザーと紐で開脚状態で固定された蒼介を見て、皇成は満足そうに何度も頷く。
亀甲縛りの縄が蒼介の大胸筋を卑猥に縊りだし、形の良いシックスパックと臍をエロく魅せ、何もされてない無防備な半剥け萎えペニスと金玉が標的にしてくれと誘っているようだった。
「さて蒼介、言わなきゃいけないことがあるだろ？」
楽しそうな皇成の言葉に、蒼介は頬を染めながら懇願する。
「オレはっ、空手道部の皆さん全員に肉奴隷として嬲って欲しいと思ってしまったクソマゾ野郎です！オレのコトお仕置きしてください！」
「うん！六十点！」
蒼介渾身のマゾ豚告白を、皇成はぶった切りだ。
「そこはこうだよ」
三角木馬でトップバッターの一年生が蒼介に耳打ちする。
「えっ、それ言うの？」
少しだけ躊躇ってから、蒼介は腹を括って叫ぶ。
「オレのだらしないペニスと金玉を、見境が無いケツを、ぶっ叩いてお仕置きしてください！お願いします！」
「合わせ技で合格！」
皇成はそう叫びながらバラ鞭で蒼介の尻を打ち据えた！
パーンっと良い音が部屋中に響き渡り、同時に蒼介の声にならない悲鳴が口から漏れ出す。
五発連続で叩いた皇成は、そのバラ鞭を耳打ちした一年生に渡す。
「んぎゃああっ！」
一年生は間髪入れずに蒼介の金玉を股の間から力いっぱいバラ鞭で打ち据え、蒼介は堪らず悲鳴を上げた。
「さあ！みんなでめった打ちだ！」



「お仕置きの禊も済んだから、今度は正月準備だな」

チンポと尻を集中的にめった打ちされた蒼介は、今度は角材に両腕を開いて縄で括りつけられて吊るされ、両足も開いた足首を縄で角材に繋がれていた。

そして首輪にはみかん、乳首にはクリップが着けられ、アナルには極太ディルドで尻尾、さらに陰嚢を根元から絞りだしたリングには大きめの鏡餅が吊るされて金玉を苛んでいる。

さすがのマゾ野郎蒼介も度重なる金玉嬲りにボロボロ泣きながら歯を食いしばっている。

「主将、これって確かに正月っぽいですけど、実際に何か意味があるんですか？」

無邪気な部員の質問に皇成は、よくぞ聞いてくれました！と言わんばかりの顔で話し出す。

「ああ、コレは『オトコ飾り』っていう縁起物だ！以前、他校との合同合宿の際に筍学園のヤツから聞いたやつだ」

「オトコ飾り？」

部員たちは、いかにも胡散臭

そうな話だと苦笑するが、皇成は話をつづけた。
「なんでもその年の新入生の中で一番の色男を全裸に剥いて松飾にして晒し、金玉と竿を嬲って絶叫させて邪気を払い、そのあと射精させて福を呼ぶそうだ」
皇成の話に、一年生部員たちが一斉に青ざめる。
「まあ、本当はお前ら一年生部員の誰かでやりたかったヤツだ」
急に黙ってしまった一年生達を見ながら皇成はニヤニヤ笑う。
「そういうわけで、特に一年生は蒼介に感謝しろよ？俺、結構マジでやるつもりだったから」
冗談とも本気ともとれる微妙な声音で部員達を焦らせてから、皇成はいきなり、蒼介の金玉にぶら下がった鏡餅を殴った。
「ぐぎゃあああっ！」
鏡餅と一緒に蒼介の金玉も吹き飛ぶ勢いで後ろに消える。

「金玉はこのくらいだな。あとは竿だけど、コレでいくか」
皇成はポケットから尿道プジーのようなモノを取り出す。
そしておもむろに蒼介の勃起したままのペニスを握ってその尿道口にあてがう。
「コレ、実は電動バイブだから」
そう言いながら、ビーズ状の棒を尿道に挿し込んでいく。
「うあっ」
異物感と激痛に蒼介は呻くがそのまま根本まで挿入して頭のスイッチを押す。
「んんひいいっ！」
バチバチと電撃の音が響いて蒼介はビクンっビクンっと跳ねるように悶える！
「おらっ射精しろ！」
蒼介の尿道からバイブを一息で引き抜き、すぐに精液が吹きあがる！
「んあぁン」

「主将ぉ。マジで蒼介くん美人っすね」
一年生部員の一人が、股間にテントを作りながらしみじみと呟く。
彼の視線の先には、パーティー会場の真ん中に造られた丸い大型ベッドの上で、両手を天井からの鎖につながれたまま、部員たちの要求する卑猥なポーズをして写真や動画を撮られている蒼介がいる。
「だろう？アレは俺のだ。お手つきしたら金玉潰すからな」
茶化した言い方をしているが、皇成が本気だということはこの一年生も十分に分かっている。
「じゃあ、アレはいいんですか？どんどんエスカレートしてるけど」
いまベッドの上では、蒼介が犬が電柱に小便をかけるときのポーズをさせられている。
その前にはチンチンをさせられていたから、犬シリーズなのだろう。
「ああ、蒼介が喜んでるからな」
実際、蒼介は嫌そうな顔どころか明らかにノリノリでやっていた。
それも今日到着後すぐに射精してしまった初心な彼からは考えられないくらいに大胆に、卑猥で、下品で、恥ずかしいポーズや表情を自ら進んで晒しているのだ。
そしてそれが最高にエロい。
全身からエロいオーラが出まくっていて、自分自身が猥褻物だと自覚しているとしか思えなかった。
「みんなのおかげだな。蒼介は自分がエロいカラダだという事に、ようやく気付いて、その事に自信が持てたんだ」
満足そうに皇成は呟く。
「とはいえ、さすがにそろそろかな」
皇成はそう言うと学ランを手早く脱いで全裸なる。
「え？主将ぉ？」
戸惑う後輩には何も答えず、ただニヤっと笑ってベッドに向かう。
ベッドを取り囲んで撮影に夢中になってる部員たちより、ベッドの上の蒼介のほうが先に全裸で近づく皇成に気付いた。
「ご主人様っ」
ブリッジをして勃起ペニスを振り回していた蒼介が、歓喜に満ち溢れた表情で跳ね起きる。
「大サービスだ。どうせならガチのセックスを撮影させてやる」
皇成の宣言に部員たちは沸き上がる。
ベッドに上がった全裸の皇成は、蒼介に向き合うと優しく言った。
「蒼介、セックスするぞ。みんなに、お前が俺のチンポを銜えこんで卑猥に乱れ狂う淫乱野郎だということを見てもらえ」
蒼介は嬉しそうに頷く。
「はい！」
皇成はそのままベッドの中央に大の字で仰向けになり、萎えたままでも太くて長いズル剥けペニスを手で持って、蒼介に向けて振った。
「蒼介」
「はい」
蒼介は何も言われずとも、犬のように這いつくばって皇成のペニスを口に頬張って、嬉しそうに奉仕を始めた。
「…ん、上手くなったな」
わずかな時間で皇成のペニスは完全勃起して天に向かって屹立する。
さすがに皇成の本気の勃起ペニスを見たことはなかった部員達も、目を見張って生唾を飲みこむくらい、デカい。
「蒼介、おいで」
「はいっ！」
そのデカい肉棒を跨いだ蒼介は、ゆっくりと腰をおろして自分のアナルを皇成の亀頭にあてがう。
そして、一気に腰を落とす。
「あああああああンっ！」
大きな嬌声と同時に、蒼介は噴き出すように射精した。

拘束をすべて解かせた蒼介を、皇成はあらためて抱いた。

部員達が取り囲んで見守る丸い大型ベッドの上で、明るい照明にすべてを照らし出され、スマホやカメラに撮影されながら。

蒼介の全身の性感帯を余すところなく舐め、愛撫して、快感で蒼介が悶え苦しみ、早く犯して欲しいと泣いて懇願してもなお何度も空イキさせてから、ようやくズル剥けの巨根を自らの手で開かせたアナルにゆっくりと、時間をかけて根本まで挿入する。

そのままグリグリと蒼介の腹の中をかき回して悶え狂わせ、その後にロングのピストン運動で前立腺を蹂躙して乱れさせ、最後に蒼介の腹の奥の奥に、大量の精液を注ぎ込む。

そんなセックスを一時間以上も部員達に見せつけた。

当然、部員達の股間も耐えられるはずもなく、ほぼ全員が下半身を丸出しにして自分で処理しながら見続けたのだ。

「今日は、よく頑張ったな蒼介」

セックスを終えた皇成は、さすがにぐったりしている蒼介を背後から抱きしめた。

そして、蒼介の耳元に口を寄せて語り掛ける。

「そしてありがとう。蒼介は今日、俺に『プレイではなく自分のすべてを貰ってくれ』と言ってくれたよな。これは俺にとってはプロポーズと同じだ。ものすごくうれしかった」

皇成の告白に、蒼介は目を見開くが言葉が出ない。

「今日このパーティーで俺の性癖、俺のモノになる、ということがどういう事か分かったと思う。そのうえで、改めて、俺から言わせてくれ」

ここで皇成は柄にもなく緊張した面持ちで生唾を飲む。

「蒼介、俺のモノになってくれ。頭の先から足のつま先まで、髪の毛一本、チン毛一本、精液一滴まで、全部、そして、お前の心も未来も。全部俺のモノにしたい」

そして慌てて付け加える。

「もちろん、セックスは拷問とセットだ。男に生まれてきた事を後悔するくらいの苦痛と醜態を味わい続けることになる」

一息でそこまで言ってから、皇成は少し落ち着いて付け加える。

「それでも、俺にとっての性奴隷は、一生のパートナーで、その、『俺の嫁』ってやつだ。絶対に大事にする」

黙って聞いている蒼介は既に耳まで真っ赤になっている。

それを見た皇成は少し余裕を取り戻して表情が緩む。

そしてさらに皇成は蒼介の右足を抱え込んで右手を尻の下から回し、完全勃起している蒼介の金玉を握った。

もちろん蒼介は無抵抗だ。

「蒼介、お前を愛してる。こんな俺でもよかったら、俺の性奴隷になってくれ」

「…はい、なります」

蒼介は首まで真っ赤になりながら、ハッキリと答えた。

固唾を飲んで見守っていた部員達から拍手が沸き起こる。

「じゃあ、誓いのキスを！」

部員の誰かがそう叫ぶ。

皇成と蒼介は一瞬だけ迷ってからキスをした。

同時に皇成は蒼介の金玉を強く握ってゴリゴリと揉み転がす。

「っ！」

それでも、蒼介は足を大きく開いたまま金玉を皇成の手に委ね続けて拷問を受け入れ、そのまま激しく射精する。

これが『ご主人様』と『性奴隷』のにとっての愛の証なのだ。

「ご主人様、オレ、一つだけご主人様に『おねだり』したい事があるんだけど」

蒼介は悪戯っぽく言う。

「いいよ、言ってごらん」

「初詣に一緒に行きたいんだ」

「そんな事か？別にいいけど」

皇成は首を傾げる。

「ただの初詣じゃないんだ。ある意味俺達に相応しいヤツ」

蒼介はニカっと笑った。

「蒼介、本当にやるのか？」
「もちろん！俺達の門出に相応しい初詣にしようよ」
靴以外は全裸でロングコートだけを羽織った皇成と蒼介は、車を降りて筍神社の境内に向かって歩いている。
「うわ、大盛況だね」
元旦の筍神社の境内は、大勢の初詣客で賑わっていた。
この神社では『全裸参り』の風習があって、十代の若い男が全裸でお参りすると特別な御利益があるというのだ。
ただし、近年は例が少なく、あっても深夜に行われているらしい。
しかし、今は元旦の午後二時過ぎで天気も良い。

「ご主人様、怖い？」
「そりゃあな。お前はやっぱり平気なのか？」
「人生終了ラインのギリギリだからね。怖いよ。でも上手くやれば、あくまで『全裸参り』に挑んだ若者で済む。大事なのは、あくまでも『お参り』に来ましたって堂々としてることだよ」
いつもとは逆に、余裕の態度で蒼介は語る。
「でも、なんで…」
皇成の当然の疑問に、まだ蒼介は答えていない。
「…牽制だよ」
蒼介は口を尖らせて短く答える。
「へっ？なんだって？」
「ご主人様はオレのモノだって、一緒に変態するくらいのバディだって皆に見せびらかして悪い虫が付かないようにするの！」
戸惑う皇成に、蒼介は小声で一気に捲し立てる。
「じゃあやるぜ！」
蒼介は一気にロングコートを脱いで均整の取れた全裸を晒す。
しかも股間では剥けた勃起ペニスがぶらぶら揺れていた。

「ああっ、もう！」
皇成も赤面し戸惑いながらもロングコートの前を開ける。
鍛え抜かれたな艶めかしい肉体と萎えても太くて長いズル剥けペニスとデカい金玉が揺れた。
大勢の参拝客が一斉に二人に注目し、カメラを向ける。
「あ～！ロシュツキョウだぁ～！」
小学校低学年の子供が無邪気に指をさして笑う。
「いやいや！全裸参りっていうちゃんとした行事なの！」
蒼介が慌てて反論するが、子供は残酷だ。
「ナニそれ？美味しいの？」
ドッと参拝客が沸き上がる。

二人がこの後どうなったかは、ネットで検索してみてね！

おわり

みなさんお久しぶりです！お元気ですか？
イラスト担当の筍屋です
ようやくコロも終息傾向でコミケも再開となりましたが
２日開催のうえ入場人数制限もあるので
これはどうせ落選と油断していたら
なんと当選してしまい　こうして本を出すコトに
いや年末のんびり温泉旅行したかったのですがw
まあ　せっかく頂いたスペースなので
こうして年末に新刊を頑張りましたのよ
コロナ以後すっかり本を出すペースが崩れ
絵の方はややシンプルな構成のものとなりましたが
どれか一枚でも珍線に触れる物が有ったら幸甚です♪
終息傾向と思ったら新規変異なんちゃらで
またまた先行きの見通しがアレですが
皆様が健康に２０２２年をお迎えできるよう
心から祈念しております
２０２１年１２月３０日
筍屋

はじめまして＆おひさしぶりです。
へたれ文字書きのた～んけーです
まさかの冬コミ当選で正直慌てました。
いつもの冬コミとは大きく違う、でも大事な一歩。
いま自分たちに出来る範囲で、
とにかくまずは開催を成功させる。踏ん張る。
そのために、いつも通りの一冊。
内容は筋肉少年を嬲ってるだけ
（いつも通り）
どこか一場面でも皆さんの
琴線に触れられたら幸いです。
２０２１年１２月３０日　た～んけー
turn_k_vf@yahoo.co.jp

ご主人様と冬休み

２０２１年１２月３０日　初版発行
発行/筍御飯ＶＦ
著者/筍屋＆た～んけー
印刷所/株式会社　ブロス
連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp

DiGiket.com

成人向
FOR ADULT ONLY